

# イネ縞葉枯病の近年の発生動向と防除対策について

病害虫研究担当 酒井和彦

## (1) はじめに

イネ縞葉枯病はヒメトビウンカ（図1）が媒介するウイルスによって引き起こされる病害です。被害株は新葉が黄白化してコヨリ状になり、重症株では全体が萎縮する「ゆうれい症状」（図2）を呈し、甚だしい場合は株が枯死します。軽症株では出穂するものの、穂の奇形（図3）や不稔を生じます。本病の多発生により減収し、本県でも古くから大きな被害があります。近年は本病の発生が増加傾向にあるため、県内における発生動向と防除対策について報告します。

## (2) 縞葉枯病・ヒメトビウンカ・保毒虫率の年次推移と留意点

**ア** 県内では2010年頃より発生面積が増加傾向にあります。2020年は、被害程度の小さいほ場が大半でしたが、面積は過去10年間で最大の10,100haに達しています（図4）。

**イ** 本田で病害虫防除を実施していない感受性品種（抵抗性を持たず発病する品種）について、移植時期と発病の関係を比較しました。5月中旬移植（コシヒカリ）では6月下旬移植（キヌヒカリ）より発病が多い傾向がありました（図5）。この要因として、ヒメトビウンカ成虫の飛来が6月上中旬に多いことが考えられます。

**ウ** 「彩のかがやき」と「彩のきずな」は抵抗性がきわめて高く、「コシヒカリ」など感受性品種で多発する条件でも発病はほとんど見られません（図6）。

**エ** ウイルスを媒介するヒメトビウンカの越冬世代幼虫の保毒虫率（ウイルスを体内に持つ虫の割合）は、年による差はありますがやや増加傾向にあります（図7）

**オ** ヒメトビウンカは、秋以降は水田内外の雑草で生息・越冬しますが、イネの刈株でも冬季に捕獲されます（図8）。ほ場を耕起せず刈株を長期間放置することは、越冬場所を提供することにもつながります。

## (3) 防除対策

**ア** 「彩のかがやき」や「彩のきずな」などの抵抗性品種を作付けることがきわめて有効です。

**イ** 「コシヒカリ」などの感受性品種を作付ける場合、移植栽培では箱施用薬剤、直播栽培では種子処理剤を使用するとともに、必要に応じて生育期間中の薬剤散布を実施し、ヒメトビウンカの防除を徹底します。

**ウ** 縞葉枯病抵抗性品種と感受性品種が混在して作付けられている地域では、抵抗性品種であってもヒメトビウンカの防除を実施します。

**エ** 収穫後は速やかに耕耘して残存株を枯死させます。



図1 ヒメトビウンカ成虫（左）・幼虫（右）



図2 発病株（ゆうれい症状）



図3 発病株（穂の奇形）

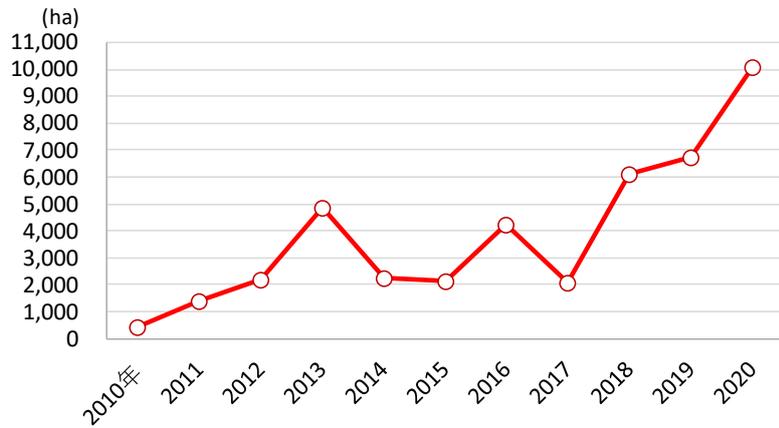


図4 発生面積の推移（病害虫防除所調べ）

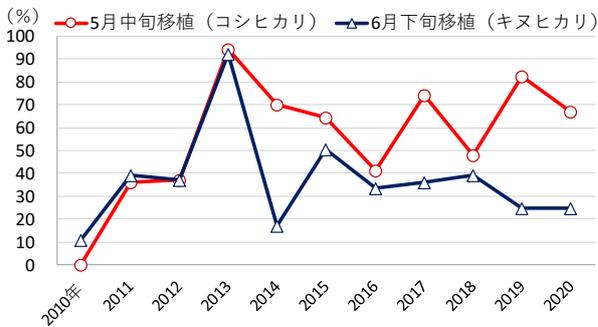


図5 水稲移植時期とイネ縞葉枯病の発病株率（玉井試験場水田・本田病害虫は無防除）

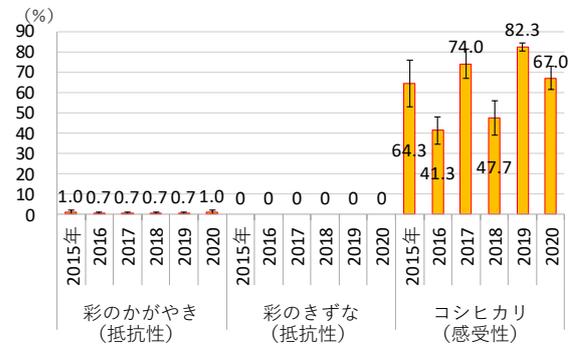


図6 抵抗性品種における発病株率（玉井試験場水田・病害虫無防除・8月調査）

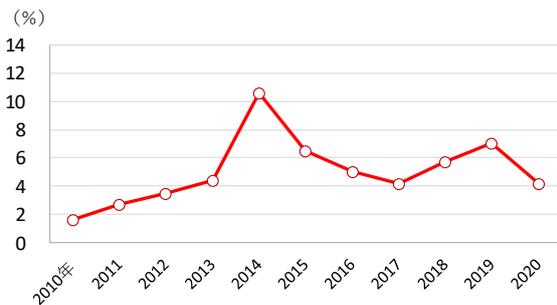


図7 ヒメトビウンカ越冬世代幼虫の保毒虫率の推移（病害虫防除所調べ）

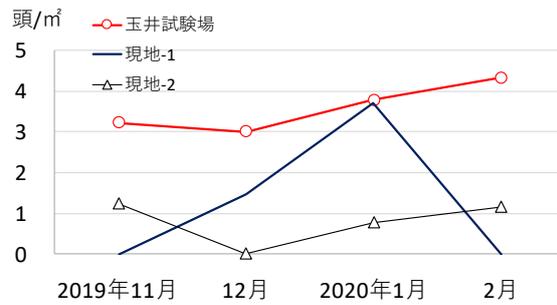


図8 残存刈株でのヒメトビウンカ個体数（50株×12回叩き出し・条間と株間で面積換算）

